学習日　月　日

24 最後の一句　森鷗外

教科書 p.130〜149

漢字の学習

1 次の新出漢字をふくむ言葉の読み方を書きなさい。

(1) 斬罪……
(2) 女房……
(3) 慕う……
(4) 裕福……
(5) 乏しい……
(6) 闘志……
(7) 和睦……
(8) 沖……
(9) 出帆……
(10) 訴える……
(11) 奉納……
(12) 暁……
(13) 丁寧……
(14) 貫の木……
(15) 詰め所……
(16) 懐中……
(17) 顧みる……
(18) 伺う……
(19) 趣旨……
(20) 偽る……
(21) 執行……
(22) 控える……
(23) 遣わす……
(24) 臆する……
(25) 陳述……
(26) 憎悪……
(27) 貫徹……
(28) 赦免……

2 次の□に右のカタカナを漢字で書きなさい。

(1) 被告に□ジン□モンする。
(2) 相談が□ス□む。

言葉の学習

● 次のそれぞれの□にあてはまる言葉をあとから一つずつ選び、記号で答えなさい。（同じ記号は二度選べません）

(1) 刑を□。
(2) 指示を□。
(3) 気色を□。
(4) 目を□。
(5) 提出書類を□。
(6) 世間との交通を□。

ア 請う　イ 受理する　ウ みはる
エ 執行する　オ 絶つ　カ うかがう

(1)□ (2)□ (3)□ (4)□ (5)□ (6)□

学習のポイント

この小説は六つの場面に分けることができる。

第一の場面は桂屋太郎兵衛の断罪が決定し、その家族の様子が語られる。第二の場面はなぜ太郎兵衛が捕まったのか、その事情が回想される。第三の場面では、長女のいちが、自分たち子どもが身代わりとなって父の助命を思い立ち、願い書を奉行所に提出するまでの様子が語られる。第四の場面からは奉行の佐佐が視点の中心になり、願い書を受け取った奉行所側の困惑が描かれる。第五の場面では桂屋の家族を取り調べる佐佐と、いちの痛烈な「最後の一句」を中心に据えて場面が描かれる。第六の場面では、いちの思惑とは関係なく、太郎兵衛が減刑されたことが淡々と語られる。

いちと佐佐の言動、心情を中心に話の要旨をとらえ、父を助けようとしただけのいちの行動が、「最後の一句」によって一変する意味を考えてみよう。

主な登場人物

◆いち…桂屋太郎兵衛の長女。十六歳。処刑される父の命乞いに、願い書を書いて奉行所に直接交渉に出向く。取り調べで「最後の一句」を残す。
◆まつ…いちの妹。十四歳。いちと一緒に父の助命を求めて奉行所へ行く。
◆佐佐又四郎成意…大阪西町奉行。いち達桂屋一家の取り調べにあたる。

本文の構成

場面	内容
第一の場面 教 初め〜132P下5ℓ）	桂屋太郎兵衛の断罪決定の高札が立つ。太郎兵衛が入牢してからの、妻と子どもたちの様子が語られる。
第二の場面 教 132P下7ℓ〜133P上15ℓ）	太郎兵衛が船頭の新七の口車に乗って罪を犯し、逃走した新七に代わって捕まった経緯が語られる。
第三の場面 教 133P上17ℓ〜138P上10ℓ）	長女のいちは、自分たち子どもの命と引き換えに父の助命を嘆願することを思い立ち、願い書を書いて、翌朝西町奉行所へ届ける。
第四の場面 教 138P上12ℓ〜140P下1ℓ）	いちの願い書を読んだ西町奉行の佐佐は即答を避け、いったんいちたちを帰らせる。
第五の場面 教 140P下3ℓ〜144P上9ℓ）	西町奉行所の尋問で、いちはお上への痛切な「最後の一句」を残す。その言葉は役人たちの胸に刺さる。
第六の場面 教 144P上11ℓ〜終わり）	刑の執行は一旦延期になり、大嘗会の執行による赦免が行われ、太郎兵衛は追放刑で済むこととなる。

読解のポイント

■ **いちの「最後の一句」に注目しよう。**

・「お上のことにはまちがいはございますまいから」（教 143P上15ℓ）

⬇

・「まちがい」の意味を、物語全体を読み取ったうえで考えよう。
・この言葉が、なぜ佐佐をはじめとする役人たちの心に強く響き、「役人一同の胸をも刺した」（教 144P上8ℓ）のかを考えよう。

■ **佐佐の思考・言動に着目しよう。**

・「大人が書かせたのではあるまいか」（教 139P上2ℓ）
・「刑を執行するまでには、まだ時がある」（教 139P上6ℓ）

⬇

子どもの嘆願などあるはずがないという先入観を持ち、すぐに判断しない優柔不断な役人として描かれる。

ポイントチェック　次の空らんにあてはまる言葉を書き入れよう。

この小説の前半では、「いち」が身代わりになって殺されることを覚悟で①□の命乞いすることを思いつき、②□に到着するまでの様子が描かれる。後半では、奉行の視点を中心にして、命乞いを訴える桂屋の家族を取り調べる佐佐と、いちの「お上のことには③□はございますまいから」という「④□」を中心に据えて描かれる。